2017.10
No.59

京都大学総合人間学部広報

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ …… 3

総人のミカタ―紹介と活動報告 …… 真鍋　公希（共生人間学専攻 D1） …… 4

前期講義を終えて

多様な「ミカタ」とともに …… 真鍋　公希（共生人間学専攻 D1） …… 7

総人のミカタの「発達」は、
総人・人環の「発達」を促す仕掛けになる …… 萩原　広道（共生人間学専攻 M2） …… 8

「政治」の講義を終えて …… 杉谷　和哉（相関環境学専攻 D2） …… 9

さがす・ぶつかる・のたうちまわる …… 村上　絢一（共生文明学専攻 D1） …… 10

所感 …… 須田　智晴（共生人間学専攻 D1） …… 11

前期総人のミカタ講義を終えて …… 近藤　　望（相関環境学専攻 D3） …… 12

「もやもや」触れ合う、総人のミカタ …… 近藤　真帆（共生人間学専攻 D1） …… 13

言葉にならない出会いを語ること …… 谷川　嘉浩（共生人間学専攻 D2） …… 14

新任の先生方より

哲学者 A と哲学者 B …… 青山　拓央 …… 15

行雲（我）流水 …… 江川　達郎 …… 16

思い出の場所へ …… 角　　大輝 …… 17

フランス語からもっと広く、遠くへ …… 守田　貴弘 …… 18

着任のご挨拶―公文書を用いた実証研究と学際研究 …… 土屋　由香 …… 19

気がつけば総合人間的ななにかになっているかもしれない …… 梶丸　　岳 …… 20

総人への愛と疑い …… 佐野　泰之 …… 21

「驚き」の魔力 …… 松江　　崇 …… 22

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ

今号では、今年度から始まった『領域交差型院生 FD「総人のミカタ」』を取り上げました。

この企画は、主として総合人間学部の学生向けに、人間･環境学研究科の大学院生が、毎週木曜日 5 限目にリレー形式の模擬講義を行っているものです。参加は自由で､大学院生による組織「総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会」が主催しています（人間・環境学研究科 学際教育研究部も後援)。

前期の講義を担当された大学院生の皆さんより、前期を終えての感想をお寄せいただきました。

Web ページ

フライヤー

日時・場所：毎週木曜日 5 限目　総合人間学部棟 1102 講義室
プログラム：16:30 ～ 17:30　模擬講義　人環院生による講義。専門分野の「ものの見方」を紹介
17:30 ～ 18:00　フリートーク　人環院生と総人生が気軽に交流する時間
18:30 ～ 19:30　フィードバック　人環院生のみで行う講義についての意見交換・検討会

今回、原稿をお寄せ下さったのは下記のみなさんです。

1. 真鍋　公希 さん　　共生人間学専攻 D1（社会学）
2. 萩原　広道 さん　　共生人間学専攻 M2（発達科学）
3. 杉谷　和哉 さん　　相関環境学専攻 D2（政治学）
4. 村上　絢一 さん　　共生文明学専攻 D1（歴史学）
5. 須田　智晴 さん　　共生人間学専攻 D1（解析学）
6. 近藤　望 さん　　相関環境学専攻 D3（地球科学（岩石学・地球化学））
7. 近藤　真帆 さん　　共生人間学専攻 D1（心理学）
8. 谷川　嘉浩 さん　　共生人間学専攻 D2（哲学）

前期集合写真

広報用 web・SNS

Facebook　Line　Twitter　Web ページ

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ

総人のミカタ――紹介と活動報告

真鍋　公希（共生人間学専攻 D1）

今年の４月から活動を開始した総人のミカタは、人間・環境学研究科（以下、人環）の大学院生が主に総合人間学部（以下、総人）の学部生に向けて模擬講義を行う院生主体の自主企画です。また５月より、学際教育研究部の後援を得ながら運営を行っています。今回、特集という形で取り上げていただけることになりましたので、総人のミカタの紹介と活動報告を兼ねて、ここでは①活動に至った背景と目的、②前期の活動内容、③後期の活動計画、の３点について、簡潔にご説明しようと思います。

1. 活動の背景と目的

総人のミカタの活動を開始するに至った背景として、大きく以下の３点を挙げることができます。すなわち、現在、「『研究を他者に語る』という教育課題」のもとに人環で取り組まれている「教養教育実習」が看過できない欠点を抱えていること、総人生の進路選択に対するサポートが希薄であること、そして総人・人環の紐帯がきわめて弱いこと、です。そこでこの誌面では、総人のミカタの活動目的を、これらの背景と関連させながら説明することにします。

総人のミカタの第一の目的は、端的には模擬講義を通した院生の教育・研究能力の向上にあります。前学部長・研究科長の高橋由典先生によれば、「研究を他者に語る」という教育課題／教育理念は、専門家と一般市民、すなわち専門分野の内部と外部のコミュニケーションを実現させるという、ある種の公共精神に基礎づけられています。そして現在取り組まれている「教養教育実習」はその訓練の一つであり、そこでは専門分野の外部にいる人に届く言葉を鍛えると同時に、外部のまなざしによって自己を相対化することが目指されているといえるでしょう。この理念と活動への共感を前提としたうえで、総人のミカタは「教養教育実習」に欠けていた側面を補うことを目標としています。それは「他者の話を聞き、理解する」能力です。「教養教育実習」では、もっぱら研究を「語る」ことで外部に開いていく能力の養成が目指されています。しかしそもそも、開かれたコミュニケーションを円滑に進めるうえでは「語ること」と「聞くこと」は等しく重要な能力のはずです。そうであるならば、前者に偏っている「教養教育実習」だけでは、その礎となっている公共精神の実現には不十分と言わざるをえません。これに対して総人のミカタでは、講義を担当するだけでなく他分野の講義の聞き手に回り、検討会で内容や方法について議論する機会をもつことで、他者の視点を「理解する」能力も同時に養うことが可能となっています。したがって総人のミカタが、「教養教育実習」の欠点を補強し、専門内外のコミュニケーションの可能性を押し広げ、自己相対化をさらに深化させられるものだということに異論の余地はないでしょう。また、自己と他者の距離感をつかむことが、総人・人環のもう一つの理念的

な柱である「学際性」の可能性の条件であることも論を俟ちません。蛇足になりますが、こうした理念と目的に基づく点で、昨今の日本の大学で取り組まれている――北米での当初の意味からはずいぶんと歪曲された制度である――FD（Faculty Development）との違いも明らかだといえるでしょう。

さて、総人のミカタの第二の目的は、総人生の進路選択への一つの指標となることです。さまざまな分野が学べるというのは総人の最大の魅力と言っても過言ではありませんが、それが裏目に出て、学部生にとっては選択肢が多すぎ、ともすれば卒論を書く研究室をなかなか決められないという状況がしばしば発生しています。総人のミカタではさまざまな分野の院生がリレー形式で講義をすることで、学系入門と同じく学部生への進路選択の指標を提供することができます。それだけでなく、フリートークの時間を設けることで学部生が気軽に先輩に相談できる環境をつくり、また前期の初回には院生が実際に今の研究を選んだ理由を紹介することも行いました。こうした時間は学系入門や学系ガイダンスなどの既存の制度にはないものであり、実際に参加した学部生にも大変好評でしたので、今後も続けていきたいと考えています。

そして第三の目的は、二つ目と重なる部分もあるのですが、総人・人環のコミュニティの活性化にあります。所属する専門が多様であるために、総人・人環では学生間の交流が他学部に比べて活発ではありません。また、学部生・院生間の交流もほとんどないのが現状です。フリートークの時間をはじめとして、総人のミカタの活動を続けていくことは、こうした問題へのひとつの解決策ともなるといえるでしょう。

こうした理念・目標を共有し、時に忌憚のない議論によってこれを洗練させながら、総人のミカタは活動を行ってきました。そこで次に、前期の活動内容について、および後期の活動計画について、簡潔に報告したいと思います。

講義風景 2017 年 4 月 13 日 第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」（前期メンバー全員が担当）

2. 前期活動内容

前期は毎週木曜 5 限時に、総人棟 1102 講義室で、計 13 回の講義を行いました。各回は前半の 60 分で担当者が計画した講義を行ったあと、後半 30 分は少人数のグループに分かれて自由に交流するフリートークの時間を設けました。参加者の平均は毎週 10 名程度、参加人数が最大となったのは初回で 18 名でした。また総人合宿にも同伴し、企画の主旨説明とプレイベントも行いました。講義および総人合宿でのプレイベントの参加者アンケートでは、講義内容と交流活動の双方で高い評価を得られました。とくに毎週の活動では、単位が出ないにもかかわらず、ほぼ毎回出席してくれた学部生も数名おり、6 ～ 7 月にも新しい参加者が見られるなど、初めての試みであることを考慮すれば、十分に手応えを感じられるものになったといえます。以下に実施した講義タイトルと担当者を記載します。詳細は web ページ（https://sojin-no-mikata.jimdo.com/）に掲載していますので、そちらもご参照ください。

＜前期講義日程＞

第 1 回	4/13「人環の先輩たちにはなしを聞いてみよう‼」（全員）
第 2 回	4/20「「自殺」を「社会学」する」（真鍋）

第 3 回	4/27「人間発達の謎へのせまり方」（萩原）
第 4 回	5/11「選挙と政策決定」（杉谷）
第 5 回	5/18「構造と公理化」（須田）
第 6 回	5/25「理解社会学と近代資本主義の成立」（真鍋）
第 7 回	6/01「人間発達の魅力へのせまり方」（萩原）
第 8 回	6/08「方法の違いと見方の違い」（真鍋･萩原）
第 9 回	6/15「選挙と政策決定 II」（杉谷）
第 10 回	6/22「無限と連続」（須田）
第 11 回	6/29「地球のすがたを知る」（近藤望）
第 12 回	7/06「地球のなりたちを知る」（近藤望）
第 13 回	7/13「「科学」とは何か」（近藤望・杉谷・須田）

また、講義終了後には毎回週 1 時間程度、その講義に関する検討会を行いました。講義の方法から内容まで多岐にわたる質疑やアドバイスは、講義担当者のみならず参加した院生全員にとって、示唆に富んだ刺激的なものであったと確信しています。9 月現在、この検討会の内容を踏まえた担当者の総括コメントを執筆中であり、後期の内容と統合して年次報告書にまとめる予定です。

3. 後期活動計画

後期も毎週木曜 5 限時に、総人棟 1102 講義室で計 13 回の講義を行う予定です。時間配分は前期と同様で、予定されている講義タイトルと担当者は以下の通りです。

＜後期講義日程＞

第 1 回	10/05「院生が語るホンネの学系･研究室紹介」（全員）
第 2 回	10/12「見えない「こころ」をどう捉える」（近藤真）
第 3 回	10/19「「定義」の作り方」（谷川）
第 4 回	10/26「ことばを理解するとはどういうことなのか」（岡久）
第 5 回	11/02「史料に広がる世界を探る」（村上）
第 6 回	11/09「間主観性でとらえる「こころ」のハナシ」（近藤真）
第 7 回	11/16 ディスカッション①（近藤真・岡久）
第 8 回	11/30「物理学の見方、物性物理学の対象、具体例」（瑞慶覧）
第 9 回	12/07「どのようにしてλ-（BETS）_2FeCl_4 は低温で反強磁性絶縁体転移するのか。そして、それの何が楽しいのか？」（瑞慶覧）
第 10 回	12/14「列島の中世を旅する」（村上）
第 11 回	12/21「話し手にとってのことば、聞き手にとってのことば」（岡久）
第 12 回	01/11「言葉で私たちは何をしているのか」（谷川）
第 13 回	01/18 ディスカッション②（村上・谷川・瑞慶覧）

また、通常の講義とは別に、総人の卒業生で一般企業等に就職された方をお呼びしての講演会と、総人のミカタの意義と効果の検証のためのシンポジウムを別途で計画中です。詳細が決まりましたら web および各 SNS でお知らせしますので、関心のある方はお気軽にご参加いただけたらと思います。

ディスカッションの様子　2017 年 7 月 13 日
第 13 回「「科学」とは何か」（近藤望・杉谷・須田）

フリートーク：学生生活や履修についての相談、模擬講義の内容に関する突っ込んだ議論など、人環院生と総人生が気軽に交流できる時間

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

多様な「ミカタ」とともに

真鍋　公希（共生人間学専攻 D1）

2016 年の晩夏にこの企画を思いつき、総人のクラスメートだった須田君に相談を持ちかけた時には、まさか今年の 4 月から活動をスタートできるとは思ってもみませんでした。しかしそこから、あれよあれよという間に協力者が集まり、12 月には「総人のミカタ」というぴったりの名称が決まり、そして 2 月には何人かの先生方に企画の詳細をお話しして「がんばってほしい」と背中を押していただきました。思い立った時から早くも 1 年が過ぎたわけですが、大きな問題が生じることもなく、なにより参加してくれた学部生の方に「おもしろかった」といってもらえる形で前期の日程を終えられたことに、企画の発案者として深い安堵感を覚えています。誌面を借りて、参加してくれた学部生の皆さんとご協力いただいた先生方、そして運営に尽力してくれたメンバー全員に改めて感謝したいと思います。みなさんのおかげで、総人のミカタは最高のスタートを切ることができました。手前味噌ですが、その準備期間の短さに反して、見切り発車だと言わせないだけの充実した企画になっていると思います。

このひとまずの成功の要因を挙げるならば、それは総人のミカタが多様性を孕んだ企画になったことに尽きるでしょう。それは単に、文理さまざまな分野の院生が講義をしているということではありません。また、行動力のある人や思慮深い人、話の巧みな人やデザインが得意な人といった、特徴的な能力を持ったメンバーが集まったというだけのことでもありません。これらの多様性が企画の意義を高め、円滑な運営に寄与したことに疑念の余地はありませんが、より重要なのは、個々人が抱く理念や思考の多様性――実のところ、教育、学際、そして総人のミカタのあり方についてさえ、メンバー内での完全な一致はありません――にあるように思います。これらが明瞭に顕在化するのは慰労会が終盤に差し掛かった時くらいのものですが、それでも講義や質疑の端々から滲み出ることで、他の誰かを刺激し、その場の議論を活性化させることは日常的でした。院生の修練の場として、学部生の学びの場として、そして総人・人環のコミュニティの場として、総人のミカタが果たしうる多様な機能が、たった 3 ヶ月とはいえ実質的なものとなったのは、この多様性を確保できたからにほかなりません。これからは、総人のミカタを「意識高い系院生の散発的な企画」ではなく「地に足の着いた持続的な活動」だと受け取ってもらえるように発展させることが求められますが、この多様性を拡大させることさえできれば、必ず達成できる課題だと考えています。

（まなべ　こうき）

専門は社会学・映像研究。指導教員は、吉田 純 教授。前期講義では、第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」（4/13）、第 2 回「「自殺」を「社会学」する」（4/20）、第 6 回「理解社会学と近代資本主義の成立」（5/25）、第 8 回「方法の違いと見方の違い」（6/8）を担当。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系・研究室紹介」（10/5）を担当予定。

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

総人のミカタの「発達」は、総人・人環の「発達」を促す仕掛けになる

萩原　広道（共生人間学専攻 M2）

人間発達学の立場から講義を担当しました。講師は「教える立場」ではなく「受講者とともに悩み考える立場」にあるというスタイルで講義をおこなったので、院生の反省会では「アナーキーな講義」と評され賛否両論ありましたが、受講生のみなさんが積極的に発言してくれたので、わたし自身はとても楽しい時間を過ごすことができました（置いてけぼりになってしまった受講生の方、配慮が足りずすみません……）。真鍋さん（社会学）とのディスカッションの回では、互いの研究態度や方法、ものの見方を突き合わせる中で、その差異がよくわかり大変学びが深まりました。フロアの反応も活発で、終了後にもかかわらず多くの受講生が教室に残って議論の続きを行っていたのを覚えています。

総人のミカタは院生の自主的な活動として始まりましたが、現行の仕組みが完成形というわけではありません。むしろ、まだまだ「発達初期」であり、まだまだ改変の余地があります。この取り組みがさらに発展し「総人・人環ならではのプログラム」として花開くためには、教員・職員・院生・学部生など、総人・人環の構成員みなさまの力を結集させることが不可欠です。わたし自身は、「総人・人環を少しでも良くしたい」というモチベーションで本企画に関わっています。「総合人間学部」が中身を伴わない理想論だけの「総合」で終わることなく、また、自分の専門分野を守ることだけに固執する集団の総体に甘んじることなく、構成員ひとりひとりが互いの専門分野を存分にぶつけ合い、安心して未知の分野に挑戦し、安心して失敗し、しっかりと立ち直ることのできる、そういう研究・教育の場として、総人・人環が新たに紡がれることを願っています。そのような方向へと総人・人環の発達を促す仕掛けとして、総人のミカタが育つよう尽力したいと思います。

（はぎはら　ひろみち）

専門は、発達科学・作業療法学。指導教員は、阪上雅昭教授。前期講義では、第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」（4/13）、第 3 回「人間発達の謎へのせまり方」（4/27）、第 7 回「人間発達の魅力へのせまり方」（6/1）、第 8 回「方法の違いと見方の違い」（6/8）を担当。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系・研究室紹介」（10/5）を担当予定。

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

「政治」の講義を終えて

杉谷　和哉（相関環境学専攻 D2）

今回、私は「選挙と政策決定」と題して、二回の講義をさせていただきました。ディシプリンとしては、政治学という枠での担当です。多くの場合、政治学の入門講義となると、政治の仕組みや、選挙のメカニズムの解説といったところから始まります。ただ、こういった講義は既に全学共通科目で取り組まれているので、別の方策を思案し、私の講義では、「若者の政治参加」が果たして本当にいいことづくめなのか、という問題提起を込めたものにしました。若者が政治に興味を持つのはよいことだ、選挙に行きさえすればよい、という昨今の風潮に疑問を提示しました。難しいポイントでしたが、皆、一生懸命考えてくれていました。

二回目の講義では、日本の戦後政治学の歴史を振り返り、政治学と社会の関わり合い方について話しました。政治学は実際の社会をよくしていこうとする学問ですが、その取り組みは必ずしもうまくいっているとは限りません。このような、政治学が抱える葛藤や問題意識を通じて学問の奥深さや楽しさ、難しさを知ってもらおうという意図でした。うまく伝わったか、心もとない面もありますが、政治学に興味を持ってくれる人もいてくれました。

二回の講義を通じて、私自身も政治学との向き合い方を再考させられました。入門書を手に取って読んでみると、そこには研究者たちそれぞれの問題意識が反映された内容になっています。まだまだ私は及びつかないところがたくさんあるのですが、こういった営為を繰り返すことで、問題意識が明確になり、よりよい講義ができるようになるのではないか、と感じました。新入生とのやりとりや、講義後のフィードバックをしっかりと吸収し、今後も思索を深めていく所存です。

（すぎたに　かずや）

専門は政治学･公共政策学。指導教員は、佐野 亘 教授。前期講義では、第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」（4/13）、第 4 回「選挙と政策決定」（5/11）、第 9 回「選挙と政策決定 II」（6/15）、第 13 回「「科学」とは何か」（7/13）を担当。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系・研究室紹介」（10/5）を担当予定。

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

さがす・ぶつかる・のたうちまわる

村上　絢一（共生文明学専攻 D1）

この春入学したての総人一回生とお話しする機会を得ました。皆様の澄んだ目が、私の中で強い印象として残っています。そこで皆様に、総人で何を学びたいか尋ねたところ、「中東の文化を論じたい」「戦争とは何か論じたい」「地形と行動の関係を論じたい」のように、明確に、あるいはなんとなく、〈論じたいこと〉がピンポイントで返ってきました。さて、ここからが総人での学びの難しいところです。私が知る限り、他の学部では「○○学が面白そう」という単純な理由から、適当な〈学問分野〉に進む人が比較的多いように感じます。ところが総人の場合、この〈論じたいこと〉がどの〈学問分野〉で実現できるのか、自明でないだけに、自分なりに見つけ出すことは容易ではありません。その間は焦燥や無理解への寂しさも、あるいは経験することでしょう。私もまた、自分が何を論じたいのか、どこでそれが実現出来るのか、適当な〈学問分野〉を見つけ出すまでに時間がかかり、見つけた頃にはすでに学部を卒業していました。私が今期担当する講義は、その中間報告にすぎません。一人ひとりの関心が、どの〈学問分野〉に当てはまるのか。限られた時間と資源のなかで、自分なりに探索し、衝突し、苦悩する。総人のミカタがその一助となれば幸いです。

（むらかみ　じゅんいち）

専門は歴史学・日本中世史。指導教員は、元木泰雄 教授。前期講義では、第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」（4/13）、第 13 回「「科学」とは何か」（7/13）の司会を担当。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系・研究室紹介」（10/5）、第 5 回「史料に広がる世界を探る」（11/2）、第 10 回「列島の中世を旅する」（12/14）、第 13 回「ディスカッション②」（1/18）を担当予定。

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

所感

須田　智晴（共生人間学専攻 D1）

数学を人に伝えるというのは、自転車を見たことのない人に言葉だけでその乗り方を教えるようなもので、なかなか手ごわい問題です。数学の話を聞いて「わかる」ためには、概念を理解する必要があります。しかしそのためにはある程度の経験が要求されることが多く、初めての人に短時間で伝えるのはなかなか困難です。今回講義を担当してその難しさを身にしみて感じました。もう少し上手く伝えるにはどうすればよいか、今でも悩んでおります。

さて、真鍋君にこの企画のアイデアを持ちかけられたのは去年の九月のことでした。その時から考えると遠くまで来たような気がします。伝手をたどって協力者を増やし、学部生の参加者もこの手の企画としては異例なほど多いようです。それは様々な幸運があってのことかもしれませんが、むしろ決して幸福とは言えない総人・人環のあり方を反映しているようにも思われます。とにかく縦横両方の繋がりが薄弱で、かと言って制度面での改善も望めない。そんな現状があるからこそ、「総人のミカタ」のような企画が必要とされたのかもしれません。今はその成否を判断するには時期尚早ですが、この企画を通じて総人・人環をより良くできればと願っております。

（すだ　ともはる）

専門は力学系理論･解析学。指導教員は、木坂正史 准教授。前期講義では、第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」（4/13）、第 5 回「構造と公理化」（5/18）、第 10 回「無限と連続」（6/22）、第 13 回「「科学」とは何か」（7/13）を担当。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系・研究室紹介」（10/5）を担当予定。

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

前期総人のミカタ講義を終えて

近藤　　望（相関環境学専攻 D3）

私は自然科学系の担当として、専門分野である地球科学の講義をしました。第一回目の講義では、まず前半で、古代から現代まで人々がどのような手法で地球のすがたを捉え理解してきたのかを紹介しました。後半では、現在の地球科学が捉える地球の内部と表層の構造について説明し、地球内部の動きが表層環境に大きく影響して生命の存在可能な環境を維持している、というお話をしました。第二回目の講義では、講義一回目で紹介した地球の内部構造、表層環境が地球の誕生後いつどのように作られ、生命が誕生・進化していったかについてお話しました。狙いとしては、地球科学の学問を垣間見ることで、自分の生きる世界の見方について新しい視座を発見してほしい、というものがありました。内容が多く、駆け足気味の講義となってしまいましたが、受講した学部生の反応は良く、ある程度狙いを果たすことができたと思っています。講義中や講義後には学部生からの質問が活発にあり、私自身見逃していた問題に気付かされもし、また、講義の準備は自分の理解の補填と再構築のよい機会となりました。この二回の講義を通して、私の見方も変わったように思います。ディスカッションでは「科学とは何か」という大きなテーマの下、数学と政治学を専門にする二人と登壇し、登壇者・受講者全員で意見を交わし合いました。結論は出ませんでしたが、それぞれの視座からの「科学」の定義があり、似通った認識もあれば異なる部分もある、ということは参加者全員が強く意識できたのではないかと思います。このことは「科学」についてだけに留まらず、あらゆる物事に対して言えることでしょうから、今後、私達がどういった視座を軸に生きるにせよ、別の視座をとる人と議論し、その視座を部分的にでも吸収していく、よい体験となったと思っています。登壇者と受講者が共に成長できる取り組みとして、総人のミカタの意義を再確認した前期講義でした。

（こんどう　のぞみ）

専門は地球科学（岩石学・地球化学）。指導教員は小木曽 哲 教授。前期講義では、第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」(4/13)、第 11 回「地球のすがたを知る」(6/29)、第 12 回「地球のなりたちを知る」(7/6)、第 13 回「「科学」とは何か」(7/13) を担当。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系・研究室紹介」(10/5) を担当予定。

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

「もやもや」触れ合う、総人のミカタ

近藤　真帆（共生人間学専攻 D1）

私から見ると、ミカタの院生メンバーはそれぞれがあらゆる面で優秀で、そのすごさは挙げ始めるとキリがない。けれど私から見ていちばん印象的だったのは、実はその知識量でも鋭さでもなく、自分の「もやもや」を誤魔化さない姿でした。

院生が学部生に自己紹介をする回で、自身の研究について「この問題に取り組まずに死んだら後悔する」と語ったのは須田さんと近藤望さん。学部生の前で行ったディスカッションでは、自分の中にずっとあった「もやもや」のことや、その「もやもや」は自分だけのものだと語った真鍋さん。メンバーそれぞれが、自分の「もやもや」を誤魔化さないこと、放っておかないこと、自分の言葉で語れること。月並みな言い方だけれど、私はそれがいちばん、すごい、と思いました。

「もやもや」って、言葉になる手前にあって、放っておけそうで、でも意外とそのままにしとくといつまでも気になる！みたいな、ちょっと気持ち悪い感覚なのかなぁと思います。そして「もやもや」はハッキリしないからこそ、誤魔化したり、無視したりもできてしまう。少なくとも私はそうでした。だからこそ、「もやもや」をはっきり表明する院生メンバーをすごいなぁと思ったわけでした。

しかしミカタに関わっていくと、面白いことが起きてきました。自分でも気づかなかった自分の「もやもや」のかたちに、徐々に気がついていくんです。あれ、私ってこんなことに「もやもや」してたんか！と。きっと、ミカタで教える・教えられる・対話することの中で、私はそこにいる人たちの「もやもや」の一端や、その人なりの「もやもや」への回答に、ちょこっとずつ触れていったんだと思います。すると今度は逆に、自分の「もやもや」の輪郭が見えてくる。…これは想像ですが、そんな変化は私だけに起きたことではないように思うんです。学部生・院生を問わず、人の「もやもや」、自分の「もやもや」がちょこっと見えて、何かがちょこっとクリアになる。ミカタって、そんなことを起こしていくひとつの場なのかもしれない。前期を終えた今、そんな風に思います。

ちょこっと見えてきた私の「もやもや」を、講義やディスカッション、茶話会で、どんな形にしていくのか。それを終えたとき、私の「もやもや」は、みんなの「もやもや」は、一体どうなっているのか。ちょっとこわいけど、たのしみです。

（こんどう　まほ）

専門は心理学。指導教員は大倉得史 准教授。前期講義では、第 1 回「人環の先輩たちに話を聞いてみよう！」（4/13）、第 8 回「方法の違いと見方の違い」（6/8）の司会を担当。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系・研究室紹介」（10/5）、第 2 回「見えない「こころ」をどう捉える」（10/12）、第 6 回「間主観性でとらえる「こころ」のハナシ」（11/9）、第 7 回「ディスカッション①」（11/16）を担当予定。

特集　領域交差型院生 FD 総人のミカタ
前期講義を終えて

言葉にならない出会いを語ること

谷川　嘉浩（共生人間学専攻 D2）

最近、鶴見俊輔という人の本をまとめて読む機会がありました。彼にとって「教育」というのは、教えられるべき「正解」の集合体をシステマティックに教えることではなく、偶然のきっかけがもたらす経験のことです。ふとした瞬間に、「あっ」と思う。そういう「ハッとする経験」にこそ、教育の核心があると彼は考えたようです（その説明をするとき、白戸三平の忍者漫画を持ち出したりするのが、この人の面白いところです）。

私個人の考えですが、研究を支える動機になるのも、偶然の出会いによる「ハッとした経験」だと思います。それは、個人的なものであって、論証で説得可能なものというより、ある程度まで説明した後は、「これ、面白いよねー、うん、面白い」みたいなことしか語れなくなる経験です。しかし、その拙い語りには、なぜか、人を惹きつける魅力があるように思えます。

研究の道に進まない人や、その分野の研究をしない人、つまり、「他者」に対して、自分の専門分野を背負って語るときには、知見を紹介すること（＝アウトリーチ）だけでなく、「あの経験なしには、いまここにいない」という個人的な出会いを語ることが大切なのかもしれません。「これ、面白いでしょ？」と誰よりも楽しそうにしてみせることは、他者から「面白そうだ」と思ってもらう上で大切なことだと私は思います。2017 年度後期に、私は「哲学」の講義をする予定です。そんな授業になればいいなと思います。

ところで、総人のミカタは、偶然から集まったメンバーから構成されているにもかかわらず、他の人が面白いと言うことを面白がる能力がすこぶる高く、知的な野次馬根性がものすごい人ばかりのような気がします。そんな稀有な人に囲まれて過ごすというのは、すごく刺激的です。絶えず自分の専門が相対化されるからです。その雰囲気は学部生にも伝わっているんじゃないか、と期待を込めて思っています。

（たにがわ　よしひろ）

専門は・哲学・観光学。指導教員は戸田剛文 准教授。後期では、第 1 回「院生が語るホンネの学系･研究室紹介」（10/5）、第 3 回「定義」の作り方」（10/19）、第 12 回「言葉で私たちは何をしているのか」（1/11）、第 13 回「ディスカッション②」（1/18）を担当予定。

新任の先生方より

哲学者 A と哲学者 B

青山　拓央（人間科学系）

時間学研究所という珍しい研究所が山口大学にあり、そちらから着任して数ヶ月が経ちます。私はこれまで哲学の分野にて、時間・自由・言語などについて研究してきました。分析哲学の入門書を出版していますが（『分析哲学講義』ちくま新書）、分析哲学という分野に特化した研究者とは言えず、自分自身も、特定の分野にとらわれない「たんなる哲学者」でありたいと願っています。近年の研究内容については、『時間と自由意志：自由は存在するか』（筑摩書房）、『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』（太田出版）等の拙著をご覧下さると、具体的なテーマやスタイルを知って頂けるのではないかと思います。

ところで、いま私は「哲学者」と書きましたが、じつのところ、大学にいる哲学の研究者が「哲学者」と自称することはあまりありません。物理学の研究者が「物理学者」と、社会学の研究者が「社会学者」と……自称したりするのに対し、哲学の研究者は自分のことを「哲学研究者」のように名乗る傾向があるのです。

これはおそらく、「哲学者」という呼称が対照的な二つの意味合いをもつことによります。この呼称は、学問としての哲学と乖離した意味でもよく使われ、学問としての哲学をきちんと修めてきた人ほど「哲学者」と名乗るのを恥じるというのが一つ目。もう一つは、哲学者とは哲学史に名を残す著名な先人を指すのであって――たとえばプラトンやデカルトのような――彼らの文献を紐解いて研究しているわれわれが「哲学者」と名乗るのはおこがましいといった意味合い。

この感覚は私にも分かります。雑誌などに寄稿する際、編集者が私の肩書きを「哲学者」と記すことがありますが、ゲラ（出版前の校正刷）の段階でそれを見つけたときは、たいてい直してもらってきました。哲学研究者のかたのなかには、同じ経験の持ち主も多いでしょう。

しかし数年前、同じような修正の機会において、ふと、直さなくてもよいのではないかと思い、それからはこの修正にあまりこだわらなくなりました。世間はそんな呼称の違いをとくに気にしていないという事実はさておき、「哲学者」と呼ばれるのをいつも訂正するような姿勢で哲学の研究を続けることを、私は個人的に止めたくなったのです（これは個人的な思いですから、他のかたの判断には異存ありません）。

先述した二つの「哲学者」のうち、学術的に軽んじられるほうを「哲学者 A」、重んじられるほうを「哲学者 B」と呼ぶことにしましょう。自分自身が哲学の文章を公にするとき、「哲学者」と呼ばれるのを固辞しておけば一種の安全が得られます。哲学者 A と同じ「素人」として扱われることを避けられますし、哲学者 B と同じ土俵に立とうとする不遜な者と思われることも避けられます。

しかし、哲学の文章を書くことは、先人から多くを学びながらも徒手空拳の部分を含み、素人っぽさと手が切れません。そして同時に、上手下手を無視するなら、それはまさに哲学者 B と同様の営みに参加することでもあります。哲学者 B と同じ土俵に立とうとすることは、不遜というより、そこから哲学者 A と同じ場所へ――書いたものの内容によって――突き落とされる覚悟をもつことなのであり、そのようにしてしか取り組めない哲学の研究がたしかにあるのです。

この観点から哲学史を見ると、哲学者 B の多くが素人っぽさを維持し続けていたことが分かります。そして、もちろんこのことは、彼らの多くが哲学史の優れた研究者でもあったことと矛盾しません。哲学をこれから学ぶかたは、矛盾しないこの両側面にぜひ目を向けて頂きたいと思います。

（あおやま　たくお）

新任の先生方より

行雲（我）流水

江川　達郎（認知情報学系）

今回の原稿を書くにあたり、いったい何を書けば良いのやらと思い、過去の先生方が書かれた原稿を参考にするために、バックナンバーを載せている人環・総人の web ページを開いた。するとそこには「総合人間学部広報は、学生向けに発行される広報誌です。」と書かれてあるではないか。私は総人出身であり、これまでにこの広報誌を（ガイダンス等で配布されるので）手に取ったことはあったが、学生向けの広報誌だということは初めて知った。私が入学した直後に発行された2003年5月号の編集後記には「学部広報は、教員が学部の学生のみなさんに、教育について、研究について、そして人生について、その熱い思いを伝える貴重な媒体である」という主旨も書かれている。それならばと、本稿ではヒマ総人（私はこの俗称をとても気に入っている）時代の私の学生生活について自己紹介を兼ねて回想し、1つの生き方として総人学生のみなさんに参考にしてもらうことにした。

私が総人に入学した 2003 年は、ちょうど今の 5 学系制度が始まった年である。入学式当日のガイダンス後に開かれた新入生の集まりみたいなのをすっぽかして、後日配布された連絡先一覧に私の連絡先が載っていなかったのを覚えている。総人に入って何かをしたかったわけでなく、総人を選んだ一番の理由は、単に文系学部の中で得意な数学の配点が高かったからである。私のように目的意識がなく総人を選んだという学生は今も昔も多いのではないだろうか。大学で勉強する気は全くなく、学生時代に勉強をした記憶はほとんどない。勉強した記憶がないといっても、休むのが嫌いな性格なので、授業の出席率は 99% を超えていただろう。大阪の実家から毎日 2 時間かけて通学していたので、この点はよくできましたと褒めてやりたい。ただし、人の話を聞いていると眠たくなるたちなので、半分以上は寝ていただろうか。楽な授業ばかりを選んで登録していたこともあり、単位は卒論単位を除いて 3 回生で取り終えた。弓道部に所属していたので、月曜日から土曜日は練習、日曜日は試合という日々の繰り返しであった。授業が無いときはたいてい弓道場で過ごしていたであろうか。部活に捧げた学生生活であった。

4 回生になり研究を始めた。理由は定かではないが、医学やスポーツ科学に興味を持つようになっていたので、糖尿病運動療法を専門にされている林達也先生にお願いして研究室に所属させていただくことになった。そのまま大学院に進学することになったが、研究者を目指していたわけではなく、スーツが嫌いで面接も苦手なため、就職活動をしたくなかったというのが進学の一番の理由である。こんな進学動機でも（だからこそ？）いつの間にやら大学教員になっているのだから不思議なものである。ただ、今は研究が好きであり、自分のやりたいことを職に持てていることには幸せを感じている。

私が人生を歩むうえで心がけてきたことは「川の流れのままに」ということである（調べてみると「行雲流水」という四字熟語が当てはまるだろうか）。流れに身をまかせていれば、いずれは大海にたどり着けるものである。逆らってはいけない。ただし、分岐点に差しかかった時に海につながる流れを見極める判断力、その流れに乗る努力、何度も沈みそうになるのを耐える精神力は必要であろう。皆さんにはそうした力を身につけてもらい、総人学生らしい「我流」に乗って欲しいものである。

（えがわ　たつろう）

新任の先生方より

思い出の場所へ

角　　大輝（認知情報学系）

2017年4月に総合人間学部認知情報学系、大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻数理科学講座に教授として着任しました。専門は複素力学系、カオス理論、フラクタル幾何学です。

私のこれまでを述べますと、私は小学生のころに遠山啓著の算数の絵本のシリーズ「算数の探検」（現在日本図書センターから復刊）を読んで以来数学が好きになり、数学者になりたいと思うようになりました。

しかし数学でも純粋数学だけで閉じていない方面を調べたい気持ちがありました。京大理学部に入学して数学を学びはじめ、4回生になるとき、複素解析が好きだったのでその関係の研究室に入ると複素力学系、複素数上のカオスを扱っていました。

ここで、物事がある規則に従って時間とともに変化していく様子を探る数学の分野を「力学系」とよびます。

力学系では、予測不可能とも思える複雑な振る舞いが見られることがあり、それをカオスと呼びます。この現象は様々な自然科学、社会科学の分野に現れるとみられており、非常に興味を持たれています。もし予測不可能と思われても、統計的な手法などを用いて、未来をある意味で予測しようとするのです。

また、カオスを引き起こす初期値の集まりを絵にすると、細部を拡大すると全体と似るような複雑な面白い図形が出来上がります。このような図形をフラクタルといい、自然界には実はフラクタル図形がたくさんあることが知られています。樹木、カリフラワー、生物の臓器、海岸線、山肌、雲の境界、などです。

私は理学部卒業後、縁あって人間・環境学研究科修士課程に進学しました。修士一年で複素力学系においてランダムに変換を取りかえる話を自ら思いついて、その話題で人間・環境学研究科で博士号を取得し、修士一年から20年以上にわたってその分野を開拓し、話を発展させています。ランダム性がシステムの秩序性を強める現象など、ランダム性のもたらす様々な新しい現象（ランダム性誘起現象）に興味を持っています。

ところで私は鳥取市で育ちましたが父の実家が叡山電鉄の元田中駅の近くにあります。昔京都市中には市電がありましたが東大路の市電が叡山電鉄と交差するところは「叡電交差」と呼ばれていました。子供のころは鉄道が好きで、父の実家に来ると叡電や市電の電車が通るたびに叡電交差にそれを見に行きましたし、よく叡電に乗りました。現在、叡電に乗って通勤して、その車窓からの風景を眺めては祖父母の家を含めた子供の頃の記憶を思い出したり、京大で過ごした学生時代を振り返ります。また、私は学生時代にデルタが好きでよくそこで考え事をしたり、つらいことがあったときにそこでじっと座ってみたりしました。今でもデルタが好きでよく行きます。

旧教養部があった吉田南キャンパスにいると、友人とともに歩いた場所を思い出します。2000年に京大総合人間学部で開かれた日本数学会において、若手数学者向けの賞をいただいて現在の4共の建物で授賞式に臨んだことは、懐かしくて大切な思い出です。

このような思い出の溢れる場所で働けることにありがたみを感じています。

最後に、学生の皆さんにとっては、何においても基礎の基礎から丁寧に学ぶことが大切です。それとともに、自分の考え方、物の感じ方、感性を大事に大切に育てていただきたいなと思います。

それはほかの人から笑われたりけなされたりすることがあるかもしれませんが、自分のなかに強く感じるものがある場合は、ご自身の感性を大切になさってください。それはご自身の宝物になるばかりでなく、他人や人類全体、そしてのちの世代の人たちへの大切な贈り物になる可能性があるからです。

（すみ　ひろき）

新任の先生方より

フランス語からもっと広く、遠くへ

守田　貴弘（認知情報学系）

2016年8月、採用面接の時に言われた。「随分と珍しい経歴ですね」と。

全共のフランス語教育、総人の言語学の教師として採用されて半年、1,2回生からはフランス語の教員として認知されているはずだが、私の履歴書には「フランス」とか「仏」という文字はない。高校時代から「外国で日本語を教えるような仕事は楽しそうだなぁ」と思っていたので学部は東京学芸大学で日本語教育を専攻したのだが、徐々に言語そのものの研究がおもしろくなって、大学院は東大に進んで理論言語学に転向。それまで第二外国語ではあるけれどフランス語は割と真面目にやっていて、留学経験もあったのでそのまま専門にすることになり、博士課程ではフランスで言語学の学位を取るに至ったという流れだ。今でも認知言語学会や他の研究会などに行けば「あいつはフランス語だから違う」と思われ、フランス語学会に行けば「あいつは理論家だからフランス語に興味があるわけではない」とみなされることもしばしばで、行き場がないといえば、ない。でも、本当に純粋培養という人がいるのかどうかは分からないけれど、そこからは程遠いところにいるのが負い目でもあり強みでもあるので、総合人間学部という、ある意味では「何でもあり」のところで働くことができるようになったというのは幸運以外の何物でもないと噛みしめている。理論言語学をやるならフランス語ではダメ、英語か日本語でなければだめだなんてルールは聞いたこともないし。「専門分野：フランス語学（特に理論言語学的研究）」と公募要項に書いた京大はエラい。

今の興味は、目下のところは類型論や言語相対性仮説であり、長期的な目論見としては言語進化と意味の問題である。フランス語と日本語はある部分では非常に似ているのだが、また別の部分では遠く離れている。でも、ジェスチャーのような非言語的な思考の表出まで広げて考えると、その遠いと思われる部分もそれほどではないという可能性が見えつつ、それでも埋められない違いもあることが分かりつつあり、類型論的にも言語相対性仮説の話としても進展してきていておもしろい。最近になって参入しつつある言語進化の面でも、神経哲学や心の哲学と意味論の問題を絡めて考える中で、行き詰まりそうでもあり、新たな展開が生まれそうでもある。いろんな分野をかすめながら、言語学以外はどれもまだまだなのかもしれないが、せっかく総人に来たのだし、本格的に学際的なことが実現できればいいなと期待してもいる。

教壇に立つ中で、学生がフランス語や言語そのものにどこまで興味を持って、フランス語学や理論言語学の道へと進んで行ってくれるだろうか、このおもしろさをどこまで伝えることができるだろうか、というのが教育の課題である。そしてやはり、このおもしろさを共有してもらうためには、研究を深めていくことが不可欠だなとも感じている。さまざまな言語や分野を視野に入れた上でフランス語の研究を進めつつ、ヒトにとっての言語、意味というものが何なのかという問いに対して、納得のできる答えを自分なりに提案できるところに辿り着きたいなと考えている。

（もりた　たかひろ）

新任の先生方より

着任のご挨拶―公文書を用いた実証研究と学際研究

土屋　由香（国際文明学系）

2017年4月1日付で着任しました。生まれは神戸ですが、前任校の愛媛大学では13年間勤務し、その前にはアメリカのミネソタ大学に4年半、広島大学に7年居りましたので、久々に関西に戻って来たことになります。

私は学部から大学院、ポスドクとまっすぐに研究者への道を突き進んで来たのではなく、会社務めを経てアメリカの大学で修士号を取得し、帰国して助手を務めた後、改めてフルブライト留学生としてアメリカの大学で博士号を取得するという紆余曲折の末に研究者になりました。そのような道筋を辿ったことのメリットもデメリットも、研究者・教育者としての自分のアイデンティティーの一部になっているように思います。

まず研究者としては、日本の大学院を出ていないことへのコンプレックスを常に抱えて来ましたが、同時にアメリカの大学院の自由で学際的な空気を存分に吸ったことで、型にはまらない自由な問題関心と研究手法で伸び伸びと研究してきました。思えば自由と学際は総合人間学部／人間・環境学研究科の学風と通じるところがあり、ここに赴任することになったのも何かのご縁かも知れません。

また教育者としては、尊敬する指導教員Elaine Tyler May先生のアシスタントとして授業を担当した経験から、多様な学生に対応する柔軟性を身につけることができました。教室にはソマリア難民二世のヴェールをかぶった既婚女性をはじめとして、様々な文化的背景の学生が居ました。また9. 11テロ事件の後、予備役（授業料免除と引き換えに軍事訓練を受け、招集されれば兵士として戦場に赴く制度）の学生たちが突如軍服を着て授業に現れ驚愕しました。多文化に触れた経験から帰国後は学生の国際交流にも力を入れ、アメリカ、トルコ、タイ、インドなどに学生を引率しました。

メリーランド大学歴史学部での修士課程の時、ワシントンDC近郊という恵まれた立地で公文書を使った実証歴史研究の手ほどきを受けたことが、研究者としての原点になっています。国立公文書館の段ボール箱に収められた文書を一枚一枚めくる時のワクワク感は、今も忘れることができません。その時の指導教員Marlene Mayo先生はとっくに御退職されましたが、今でもワシントンに行くたびにお目にかかります。またミネソタ大学アメリカ研究学部の博士課程では、聞き取り調査や映像資料などを用いる新たな研究手法も学びました。小さな子どもを連れて留学していた私を、教員や院生仲間はごく自然に受け入れてくれました。互いの原稿を読み合い、コーヒーショップや指導教員宅で議論した経験は何にも代えがたい財産です。

主たる研究テーマは冷戦期アメリカの広報文化外交です。冷戦は政治・経済・軍事面における競争のみならず、新興独立国をはじめとする世界の人々の「心」を勝ち取るための心理戦・情報戦でもあったという観点から、特に原子力を中心とする科学技術を用いた広報文化外交を研究しています。これとは別に、前任地の愛媛で偶然出会った遠洋マグロ漁業関係者への聞き取り調査も続けています。彼らは水爆実験の被害を受けたり貿易摩擦に翻弄されたりしながら、冷戦期の国際関係の中で、小さいながらも重要な役割を果たしていました。公文書には表れない、移動労働者や漁民のような「小さなアクター」も含めた冷戦期の国際関係像を描きたいと思っています。京都大学のすばらしい研究・教育環境の中で、これからも益々研鑽に励みますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（つちや　ゆか）

新任の先生方より

気がつけば総合人間的ななにかになっているかもしれない

梶丸　岳（文化環境学系）

初めまして。2017年3月に文化人類学分野の助教として着任しました。とはいえ「初めまして」というよりどちらかというと気分は浦島太郎です。

私は総合人間学部には1999年に入学し、その後人間・環境学研究科に進学しました。2009年に研究指導認定退学して学籍がなくなるまで10年かかっているわけですから、小学生が中学を経て高校1年生になるぐらいの期間ずっと京大生だったわけです。大学というのはまことに恐ろしい所です。卒論の指導をしていただいた瀬戸口浩彰先生はまだ見た目もそのままに本学部でご健在ですが、大学院の指導教員だった菅原和孝先生は少し前に定年退職されました（ご本人は健在です）。京大を離れてから関東に3年住み、その後3年間は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターというところを中心に京都で非常勤講師暮らしをしていました。

私の専門は一応、文化人類学ということになっています。文化人類学とは人間が暮らすどこか（人間がいるならどこでも可）に行って「他者（のなにか）を包括的に理解しようとする」学問です。社会や宗教、生業活動、贈与、ジェンダーなどがメジャーなトピックとなりますが、人間が行う活動なら基本的になんでも研究対象になり得ます。私は大学院に文化人類学を専門として進学して以来、「掛け合い歌」をテーマに研究を続けてきました。掛け合い歌は決まった旋律に即興で歌詞を付けて歌を掛け合う芸能です。もともと対人コミュニケーションに関心があってこのテーマを選んだのですが、具体的に研究対象とした中国貴州省の掛け合い歌を包括的に捉えるべくあれこれ模索しているうちに、メジャーな文化人類学はどこへやら、気がつけば言語人類学と民族音楽学と関連諸分野を幅広く扱うようになっていました。博士論文では3分の1が社会人類学っぽい話、3分の1が言語学と少々の音楽学、残りがおもに遊び論になっています。最近は秋田県とラオスの掛け合い歌が研究の中心になっていますが、研究方針はわりとそのままです。そんなわけで私は自分を単一の学問分野にアイデンティファイすることが難しいのですが、文化人類学という分野のなんでもありな雰囲気は気に入っています。

総合人間学部は人間活動以外を研究する先生も数多くおられ、文化人類学よりさらになんでもありです。では総合人間学部はなにをするところなのか。私は、「総合人間になるところ」なのではないかと勝手にちょっと思っています。ちなみに、私が入学する直前の卒業式で総人代表とその仲間たちは「僕たち、私たちは、立派な総合人間になりました！」と言って証書を受けとったそうです。

文化人類学が明らかにしているように、人間はいろいろなことをやって生きており、世界にはいろいろな在り方・生き方があります。個々人はそのうち確固とした「なにか」になるものですが、総合人間学部の多様性は常にほかの「なにか」が世の中にあることを意識させます。世界には他の在り方がある、人間には他の生き方がある、そのことを前提に物事を捉える幅広い視野と柔軟性を持つ者、それが総合人間なのではないでしょうか。

助教は授業などで学生と触れあう機会があまりないのですが、微力ながらそうしたよくわからない確固としたなにかになる手助けができれば、と思っています。

（かじまる　がく）

新任の先生方より

総人への愛と疑い

佐野　泰之（人間・環境学研究科）

高校生の頃から思想や哲学に興味がありましたが、就職で潰しがききそうだからという理由で受験では情報系の学科を志望し、第一志望だった京大工学部は落ちたので後期試験で阪大基礎工学部に入学しました。思想や哲学は趣味として片手間に勉強しようと思っていたのですが、待ち受けていたのは学科の必修科目で隅々まで埋め尽くされたカリキュラム。専門以外のことを勉強する時間なんてありません。これはたまらんと脱出計画を立てているうちに見つけたのが、「文理にまたがる多様な教養」という総合人間学部の謳い文句です。ホームページを食い入るように何度も読み返し、この学部なら自分が本当にやりたい勉強ができるに違いないと、嫌で嫌でたまらなかった受験勉強をやり直す決意をしたときのことはよく覚えています。

いわゆる仮面浪人を経て無事総人への入学を果たしてからは、興味のある科目は手当たり次第に登録し、その大半は結局最後まで出席せず、実際に受けてみて本当に面白いと思えたいくつかの科目の勉強と、それ以上に読書に耽りました。SF・幻想文学研究会に所属していたため、そこで小説・漫画・映画・アニメ・学問等々について語り合う仲間を得、図書館と会員の部屋を行き来する日々。最終的には主専攻を哲学、副専攻を認知科学として学部を卒業しましたが、上記のような学部四年間での経験は、二〇世紀フランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティ――彼は狭義の哲学のみならず、当時の科学や芸術を参照しながら自分の思想を練り上げました――の思想解釈という自分の今の研究にも活かされています。

と、まあこんな次第で、僕個人は総人・人環で得た「自由」をフル活用してそれなりに満足度の高い大学生活を送らせてもらったわけですが、では総人・人環の教育研究環境が全く非の打ちどころのないものだったかというと、そんなことはないというのが偽らざる実感です。学部では三回生になってもなかなか専門分野を決められず、自分は何者にもなれないのではないかという不安に苛まれていました。卒論や修論では、専門分野の体系的な教育を受けていないがゆえの知識・スキルの不足と、先生がたの妥協のない要求との板挟みに最後まで苦しみました。それも修行のうち……と割り切れるのは僕が曲がりなりにも生き残ったからで、僕と同じような悩みに直面して、大学を去ったり、不本意な留年をしたり、精神的に潰れてしまう学生も多く目に／耳にしました。

教員や組織にお膳立てしてもらうのではなく、自分の力で道を切り拓け――京大の伝統とも言えるこうした教育観は多くの美点をもっています。しかし、無計画に放置することと、必要かつ十分なサポート体制を整えたうえで学生の自発的な成長を見守ることは違うということもまた確かです。大学の「ユニバーサル化」が進行し、高等教育に対する学生の「ニーズ」が大きく変わった今では、一を言うだけで五や六を理解する優秀な学生を相手に、研究に邁進する自分の背中を見せることで教育を行なうというイメージはもはや過去のものとなりました。その結果、時代を牽引する研究を遂行し、次世代の優秀な研究者を輩出するという大学の学術的使命と、いわゆる一般教育の理念に照らして市民的教養をそなえた人間を育成するという大学の社会的使命の間には葛藤が生まれつつあります。この葛藤をどう乗り越えるか――特にここ総人・人環にあっては、専門教育と一般教育双方にとって重要な意義をもつ「学際」という理念をどう内実あるものにしていくか――そうした問題を考えることが僕のここでの第二の研究テーマです。任期中にどこまでのことができるかはわかりませんが、総人で培った「多様な教養」を武器にこの難題に挑戦していきたいと思います。

（さの　やすゆき）

新任の先生方より

「驚き」の魔力

松江　　崇（国際文明学系）

2017年4月1日に、北海道大学文学研究科から准教授として着任いたしました。京都はおろか関西地域に在住した経験すらないのですが、縁あって中国学の長い伝統を誇る京都大学の一員として研究・教育に携わる機会が得られたことに感謝しています。

専門は古代中国語。分かりやすく言えば「漢文」ですが、大学進学後にそれを研究対象とするまでは、どこか色褪せたイメージしか持ち得ていませんでした。元々、未知の世界の解明に夢を持ち、文化人類学や少数民族語のフィールドワークに憧れていた私にとって、漢籍すなわち古代中国語文献の世界は、どこか説教臭い内容に満ちた、手垢にまみれた膨大な文章の大海――今にして思えば浅はかなことこの上ない認識ですが――のように感じられたのです。それが大学進学後、ふとしたきっかけで人物批評から冒険譚、恋愛小説といった多彩な内容の漢籍に接することになり、すっかり魅了されてしまいました。

そして「意外に面白いんじゃないか」という思いは、漢籍の内容から次第にその記述言語たる古代中国語に移っていきました。形態変化もなく、一見、漢字の羅列によるメモにすぎないような古代中国語が、実は非常に精緻な文法規則を備えた言語であることを知り、強い衝撃を受けました。

一例として、古代中国語のうち、『論語』などが成立した春秋戦国期の言語の文法を取り上げてみましょう。この言語では、一見、形式上は一般の能動態と同じ文が、しばしば受動的意味を表すことがあります。そのために昔は「文法がない」などとさえ言われていたのですが、近年の研究によって、実は動詞の種類と文型との組み合わせにより能動と受動とを標示する複雑で精巧なシステムが存在することが明らかにされたのです。そしてこのシステムには「能格性」と呼ばれる、ヨーロッパのバスク語とも共通する言語的性質が深く関与していることが分かってきました。私が漢字の羅列によるメモだと思っていたものが、東アジアから遙かに遠い地域の言語との共通性を持っていたことに、ある種のロマンさえ感じました。

古代中国語に関して私が受けた驚きは文法だけではありません。例えば、千年以上前の漢籍に出現し、その後、文献から忽然と姿を消したような語彙が、現代の活きた方言の日常語に見出されることがあるのです。活きた方言の現在の話し手は、すでに語源意識を失っており、「漢字」が当てられない来歴不明の語彙とだけ認識していることが多いのですが、古代中国語におけるその語彙の音形・意味用法を詳細に検討することにより、千年を隔てた後の方言語彙と結びつけることができることがあります。文献に記載されるステイタスを失った語彙が、千年もの間、ある地域に人知れず継承され続けてきたという歴史的事実そのものに、驚きと感動にも似た気持ちが湧き上がりました。

さて以上のような「驚き」が、今でも私の研究なり勉強なりの原動力です。そして総合人間学部の学生の皆さんにとっても同様に原動力になり得るものと信じています。ただし、「驚き」を感じるためには、予め何らかの「偏見」なり「予見」なりを持っておく必要があるのでしょうから、日頃から知的関心を広く持っておくことが大切なのかもしれません。文理融合の総合人間学部は、様々な「驚き」との出会いが期待できる環境にあります。私自身も皆さんと共にこの魅力的な学問の場を楽しんでいきたいと考えています。

（まつえ　たかし）

編集後記

◆『総合人間学部広報』第 59 号をお届けいたします。今号は、特集「領域交差型院生 FD 総人のミカタ」と、新しくお迎えした先生方のうち 8 名の方からのメッセージを掲載しました。「総人のミカタ」は人環の大学院生が総人学生に対して模擬講義を行う院生主体の自主企画で、学際教育研究部がバックアップしています。院生諸君の手記からは、研究者として、（未来の）教育者としての確かな手ごたえを教室の中でつかんでいった躍動感が伝わってきます。このような素晴らしい企画が息長く続いていってほしいと願わずにおれません。また、新任の先生方のご挨拶を拝読していると、研究のことは勿論ですが学生時代のエピソードや人となりが伺えるものもあり、大変興味深いです。仲間として、総人・人環の一層の発展のためにともに頑張りましょう。（K・I）

人間・環境学研究科
総 合 人 間 学 部
広報委員会